

目次

凡例	v
推薦のことば	vii
はじめに	1
第一編 文化のたたずまい	5
第一章 『蜻蛉日記』の身体	7
第一節 『蜻蛉日記』の生理——角田説の検討を中心に——	7
第二節 『蜻蛉日記』の生理描写と更年期	29
第二章 手紙・装束の表現	47
第一節 文付枝という文化——『蜻蛉日記』の「うつろひ菊」を中心に——	47

第二節 『とはすがたり』の紙と文——有明の月をめぐって——	67
第三節 『蜻蛉日記』下巻「遠度求婚譚」の文を読む	95
第四節 『源氏物語』と『蜻蛉日記』に於ける改服	113

第二編 日記文学のたたずまい	129
----------------	-----

第一章 日記文学のことば	131
--------------	-----

第一節 歌を囲むことば——『土佐日記』から『蜻蛉日記』へ——	131
第二節 王朝の武蔵野——『更級日記』の読書方法に触れて——	155

第二章 『和泉式部日記』の表現	175
-----------------	-----

第一節 『和泉式部日記』の背景——「つれづれ」「はかなし」をめぐって——	175
第二節 『和泉式部日記』と帥宮挽歌群における悲哀の方法——視覚と聴覚——	201
第三節 『和泉式部日記』に於ける帥宮像	223

第三編 和歌のたたずまい	245
--------------	-----

第一節 屏風歌について	247
第二節 『拾遺集』の新しさ——雑春・雑秋をめぐって——	259
第三節 翻刻『拾遺集口伝』	279

第四編 一般普及のたたずまい	287
----------------	-----

第一節 古典文学普及のための〈加工〉	289
第二節 一般普及としての活動	307
第三節 王朝挿絵一覧表	329

論文まとめ	339
おわりに	349
初出一覧	353

凡 例

一、諸論考は初出に手を加えてある。特に文章表現は、大幅に手直しを施した。

二、事（こと）や物（もの）などの漢字仮名の統一はしない。漢字、仮名、数字表記は表現や文脈の要請によって相違する。

一、各作品の引用については以下の通り。『蜻蛉日記』の本文は『新版 蜻蛉日記Ⅰ（上巻・中巻）現代語訳付き』『新版蜻蛉日記Ⅱ（下巻）現代語訳付き』（川村裕子、角川ソフィア文庫、二〇〇三年）による。

また、『うつほ物語』は『うつほ物語 改訂版』（室城秀之、おうふう、二〇〇一年）により、『枕草子』は『新訂枕草子上』『新訂枕草子下』（河添房江・津島知明、角川ソフィア文庫、二〇二四年）、『和泉式部日記』は『和泉式部日記 現代語訳付き』（近藤みゆき、角川ソフィア文庫、二〇〇三年）、『更級日記』は『更級日記 現代語訳付き』（原岡文子、角川ソフィア文庫、二〇〇三年）によった。それ以外は、特に断らないかぎり、新編日本古典文学全集（小学館）による。また、和歌に関しては古典ライブラリーを基本的には使った。それ以外の出典の場合は、そのつど記した。なお、すべての出典に関して、表記は改めた所がある。

一、参考文献の初出はなるべく付すようにした。論文題名が同じ場合は出典のみ記した。

一、本書末にそれぞれの論考をまとめた。ここで本書の概観をつかんでいただければ幸甚である。

推薦のことば

山 本 淳 子

川村裕子氏の三冊目の学術論文集『王朝文学のたたずまい』がここに刊行されることになった。その巻頭に、氏よりもはるかに研究者としての歩みも学術的知識も少ない私が「推薦のことば」を記すとは、なんと僭越極まりないことだろうか。しかしそれを十分に弁えたうえで、やはり本書を心から推薦する。川村氏は長年にわたり強い意志を持って、王朝和歌・日記文学の研究および普及・啓発活動を継続して来られた。本書にもその間口の広さは明らかだが、一方で氏を貫く大きな方法意識があったことも本書からは見て取れる。氏ほどの論でも、人の生の具体像、生活実態、社会の現実に着目されているのである。また氏はこの方法意識を讀者——現在研究を進めている諸兄のみならず、これから研究者を志す学生たち、また研究とは一線を画しつつも古典文学を愛好する方々に伝授して下さっていると感じる。

本書第一編「文化のたたずまい」の第一章第二節に掲げられた『蜻蛉日記』の生理描写と更年期」は、二〇二四年八月に開催された日記文学会第八五回大会発表にもとづいている。発表をオンラインで拝聴した私は、質疑応答のなかで氏に問うた。生理や更年期という生々しい素材は、当事者であろうとなかろうとつい羞恥心を覚えてしまうものだと思うが、発表には勇気が必要だったのではないか。愚問のレベルにも達しない感想で、いっものならば心に飲み込んだまま口にしなかったに違いない。だがその時はオンラインの間接性に助けられて、この

凡庸な問いを氏に投げかけずにはいられなかったのである。川村氏は穏やかに、また毅然として、この素材を古典研究で扱うことが今まさに必要なのだと答えられた。それこそが、同章第一節『蜻蛉日記』の生理——角田説の検討を中心に——と二節で氏が触れておられる、生理という素材に対する古典研究の側からの従来の無反応、一方で学際的研究、特に社会学からの二〇〇〇年代以降の活況、そしてこれからの文学研究に対する有用性である。

生理は女性の身体現象であり、だからこそ個人によって一様ではない。生理周期などの学説は、たとえそれが膨大なデータをもとにしているとしても、一般化された段階で個人に完全には適用できないものとなる。体とはそういうものだからだ。当事者は生理によって、誰のものでもない自分自身の身体の現状を明確に知る。というよりも、否応なしに突き付けられる。川村氏は『蜻蛉日記』における道綱母の生理描写から、生理があつて「まだ産める私」から生理はあつても「もう産めない私」への変質を彼女が突き付けられたと看破された。現実とこのこうした対峙は、『蜻蛉日記』の本質にかかわる。したがって研究者はこの素材をタブー視してはならず、むしろ豊穣と見るべきなのだった。

生理関係に多くの言葉を割いてしまったが、本書の他の論からも同様の姿勢が窺われる。それぞれの論については本書末の氏による丁寧な論文まとめがあり、そちらに譲るとして、第一編第二章の「手紙・装束の表現」ではそれぞれのモノの実態が手掛かりとされている。手紙や装束は有職故実の分野で厚い研究史を持つが、氏はこれらを突破口として各作品における人の心を読み解く。注に付載された【書札礼一覧】【手紙と紙の参考文献】が有難い。第二編「日記文学のたたずまい」は、ことば——書記言語と音声言語——を拠りどころとして、『土佐日記』『蜻蛉日記』『更級日記』そして『和泉式部日記』の特質を読み解く。家集と日記との相違が浮き彫りにさ

れ、後者ならではのキャラクター造型も明らかにされる。第三編「和歌のたたずまい」で膝を打ったのは、第二節『拾遺集』の新しさ——雑春・雑秋をめぐって——に指摘される暦月・暦日意識であった。同論は『拾遺和歌集』の両巻にこの意識の成長が看取でき「勅撰集における新たな時のとらえ方をあらわしている」として、特に「年中行事のとらえ方」に一項を割く。年中行事は貴族にとって重要な政務であり、それらへのまなざしが『拾遺和歌集』の頃に成熟したことは、当時次々と制作された儀式書からもうかがえる。つまり本論は時間認識に関わって、社会と和歌そして勅撰集という国家的文化事業の三者が同調して変化を遂げたことを指摘しているのである。

そして第四編「一般普及のたたずまい」に、私は最も感動を覚えた。研究者であれば誰しも当然、研究は楽しい。しかし現状、研究者の大半が所属する大学院や大学という高等教育・教育機関において、古典文学の存在感は減衰の一途を辿っている。そうした中で川村氏は、先端的な学術研究の傍ら一般普及に力を注ぎ、精力的な活動を続けて来られた。例えば市民向け講座、教養書の単行本、単行本の監修、まんが監修、雑誌記事の監修、テレビ番組の監修など。氏自身が発信するインターネットのブログやXもある。日々のまさに数え切れない活動によって、氏は古典文学の愛好者を下支えし、さらには増やし、危機的な現状を打開しようとされている。これだけでも既に平安文学研究者の誰しもが敬服してやまない偉業だが、さらに本編では普及のための技術を開陳され、後進を導いておられる。私が感動したのはその点である。

例えば第一節「古典文学普及のための（加工）」では、『蜻蛉日記』作者の「本朝三美人」という古伝をどう生かすか、捨てるか。第二節「一般普及としての活動」では、現代語訳に使う語彙を読者層によってどう吟味するか。監修には落とし穴があり、一度誤謬を見逃がせばそれが流布してしまう恐れがある。一方でまんがなどのビ

ジュアル監修は研究者に新たな発見をもたらす可能性がある。一つ一つをうなずきながら読んだ。

古典文学の存在感が高等教育機関で減衰していると述べたが、それは古典文学が就職活動に直結しないからである。コストパフォーマンスやタイムパフォーマンスの思想のもとに生き急がざるを得ない現代、古典文学はそのツールにはなりがたい。学生が集まりにくいのはそのためである。しかしそんな今、年齢を問わず効率一辺倒から片足でも踏み出した層には、手堅い古典愛好者がいる。氏にはXで約八〇〇〇人のフォロワー（常時受信者）がおり、ブログは現在の時点（二〇二五年七月）で約五四万六千回講読されている。王朝文学は彼らに渴望されているのである。

第二節の最終項「普及活動の変容と今後」で氏が述べるように、普及の状態は今、格段に進歩している。一般聴衆は「研究との接点による新見解」を求めるまで進化している。彼らに応えることは研究者の社会的義務だが、一方で社会貢献の喜びでもある。氏は本書を通じて、氏に続いて私たちが研究者としての存在意義を実感できるように導いておられる。しかも号令をかけるのではなく、具体的な手引きを掲げてである。

このように本書『王朝文学のたたずまい』においては、著者川村裕子氏を貫く研究意識と多様な手法、そして熱意に触れることができる。本書が氏自身の「たたずまい」を現わしていると感じる読者は、私だけではないだろう。長い病を克服され、本書を世に問われたことに胸が熱くなる。心から祝福して推薦のことばにかえたい。

二〇二五年 祇園祭の日に

はじめに

本書は『蜻蛉日記の表現と和歌』（笠間書院、一九九八年）、『王朝文学の光芒』（笠間書院、二〇一二年）に続く、三冊目の論文集となります。最初に本書の方法や構成について述べておきましょう。

王朝の文学は様々なたずまいを見せています。それは文化的なものであったり、日記や和歌の表現をくるむ光であったりします。多面的に絡み合っているその光を考察すべく、文化、日記、和歌、普及に分けてみました。これらは今現在の自分が果たすべき研究課題となっています。

文化的な解析方法としては、アナール学派というものに近くなっています。アナール学派は、歴史のなかの有名な人物や出来事に収斂することなく、「生活実感」を追求していく方法。特徴としては調査が広範になるという色彩を持ちます。

なぜなら、辞書的な意味ではない厚みのある表現を捉えることを目標とするからです。まず、対象にする物に関連する資料分析から始まります。ここでは、「物」が「物」だけで終わらず、「人間」にとって如何なる意味を持っているのか、それを追求するという目的を持ちます。

この論文集では、第一編に色濃くその方法が滲み出ています。ここでは、今までタブー視されていた女性の生活実感である生理や出産、更年期を扱いました。

特に、誤った認識のまま放置された生理について考察を加えています。『蜻蛉日記』のなかにある産む性と生理描写がどのように絡みあっているのか、生理の表現が作品のなかで如何なる意味をもつのか、そのようなことに関する考究を提示いたしました。時代は違えど、このような生理の調査が、現在の「生理の貧困」や「生理休

暇の問題」を考えるうえで、ヒントを与えていると愚考します。

また、第二編は日記文学の表現論となっています。『土佐日記』から『蜻蛉日記』への文学史的な表現継承。そしてまた『和泉式部日記』や家集のなかに和泉の人物像をあてはめる危険性について述べました。その際、通説の反論として日記と和歌の表現形態がいかに相違するか、という点を中心に解析いたしました。

第三編は、和歌の考究となります。最初に屏風歌、それから『拾遺和歌集』へと続きます。ここでは、一条朝の持っている言葉の広がりや細分化に着目しました。特に『拾遺和歌集』の新しい部立が暦日意識という当時の時の流れを表出させ、この日付けにこだわる意識が日記文学の隆盛を招いたことを指摘しました。

最後の第四編。ここはやや異質ですが「古典の普及」についての提言です。これは古典文学弾圧の現在にあって、喫緊の課題と言えるでしょう。自分の些細な体験を基にしたものですが、普及と研究がつながっていることをいささか書いてみました。またどのような活動が今後必要となるかも僭越ながら述べました。

なお、それぞれの内容については、最後の「論文まとめ」で概要を書いておきます。それをお読みいただければ幸いです。また、ここでは、代表的な論文の内容を二つ挙げておきます。お時間のない方や本書の外郭をお知りになりたい方はこの二編をお読みいただきたい……。

それでは以下に代表的な二編のまとめを挙げておきましょう。

■第一編 第一章『蜻蛉日記』 第二節『蜻蛉日記』の生理描写と更年期

ここでは平安時代の出産・生理の具体的様相を辿った。まず出産が困難であることが諸注釈に示されない現状を指摘した。敦成誕生では「男子誕生」のみに注がつく不自然性を解析した。また生理研究に於いて、他分野で

は常に用例として出される『蜻蛉日記』が文学側から全く考究されていないことを問題視する。

まず始めに、今まで考究されなかった平安時代の経血処理について述べた。平安時代は『医心方』によれば、意外にタンポンの使用例（病氣治癒）が多く、なおかつ社会学系の研究に於ては道綱母が絹の袱紗を使っていたことが記される。このようなことも無視せずに『蜻蛉日記』の注釈に書くべきではないか。

また、ここから『蜻蛉日記』の二つの時期に生理描写が置かれる意味について考察を加えた。一つは九七一年の鳴滝籠り、もう一つは九七二年の正月・二月である。この一年にも満たない間に、生理が「まだある話（＝出産の可能性あり）」（中巻）から「（生理があつても）出産をあきらめる話」（下巻）に切り替わる。更年期前後の揺らぐ生理記事は、残酷ともいえる推移を示しているのであった。

つとに、『蜻蛉日記』の更年期について角田文衛は「静心」と解析するが、「更年期＝生理がなくなり静心」というのは誤った解釈である。更年期になっても、生理は忽然となくなるわけではない。また精神的に安定とはかけ離れた不安な状態に入る。

現在でもバランスが崩れる更年期は女性にとって命がけである。このような不安定な状況が『蜻蛉日記』には刻みつけられているのであった。

出産を祈願しながらもそこから排除される性。『蜻蛉日記』は夫からの裏切りを書いただけではなく、自分の身体から裏切られ続ける状況をも書き記したのであった。

■第四編 第一節 古典文学普及のための（加工）

古典文学普及のために如何なる加工が必要なのか。通常、研究とは関係ないと思われる一般普及のなかで、

実は様々な調査が必要とされているのであった。

『蜻蛉日記』の場合問題となるのは「本朝三美人」である。この文言は『蜻蛉日記』のみならず『百人一首』の道綱母にも付される。

ところが、「本朝三美人」の他の二人は誰か、と聞かれて即答できる人は少ないだろう。このような注釈のひずみから事実を掘り出す作業が普及活動には必要となる。

また、現代語訳に於いては、ただ単に文法的に合っているだけでは文脈の波が伝わりづらい。そこにはどのような工夫が必要か。そのようなことについて述べた。そして古典の公開講座（市の主催）まで大学から止められてしまった当時の状況も、歴史的な事実として書き残した。

第一編 文化のたたずまい

第一章『蜻蛉日記』の身体

第一節 『蜻蛉日記』の生理——角田説の検討を中心に——

一、はじめに

ここでは研究のなかであまり顧みられてこなかった女性の身体性について考究を加えることとする。まずは今残っている日記文学作家たちは女性が多い、という当然のことを指摘しておきたい。つまり、女性の身体性が、多かれ少なかれ作品の表現に陰影を与えていることは否定できないだろう。

ことばの裏側に込められている本質を探るためにも、出産や生理といった実態を切り離しては、表現や文脈に込められた意味を読み取ることは不可能である。

ところが、古典関連に於いて、特に生理に限ってみても、この女性性についての具体的論考はなきに等しい。もちろん、それは作品のなかの用例が僅少であることも起因している。ただし、文化という大枠を考えると、歴史的資料をも総動員して、一度生理の総体的な考察を行う必要があるのではないか。

さて、この論の構成としては、はじめに作品の生理例を提示する。それから、古典の生理研究では金字塔ともいえる角田論文（角田の生理関係著作は四に記す）について、検討・解析を加えたい。

なお、平安時代全般に於ける生理関係の調査は、今まで皆無であり、ここで述べた調査結果は、一からの作業

となっている。そのため、見落としもあるかと愚考する。どうかご寛恕いただきたい。

以下、平安時代に於て「生理」という単語そのものはないが、ここでは「生理」で統一していくこととする。それでは、古典に於ける生理の呼称を挙げておこう。「穢れ」、「汚れ」、「血穢」、「月水」、「経水」、「月経」、「月のもの」、「月華」、「月事」、「さはり」、「月さはり」、「佐波利」、「不浄」、「忌」、「忌日」、「憚りごと」、「つつしむべきこと」等であろうか。⁽³⁾

調査としては、まずこの単語を使用しているものを各種索引類で探した。⁽⁴⁾

しかしながら、作品及び古記録に於ては、前後の文脈を読まないと判断できないものもある。よって、作品類・古記録類を個別に探すこととした。また歴史的資料は、『大日本史料』により確認した。

二、平安時代の文学作品に於ける生理

さて、ここからは生理の基礎知識として、作品類にあらわれた生理の記事を見ていく。平安時代における文学作品のなかの生理はそれほど多くない。

まず和歌では和泉式部詠が挙げられる。

○はれやらぬ身のうき雲のたな引て月のさはりとなるぞかなしき

(和泉式部Ⅳ二五八)

この歌は、「熊野へまうでたりけるに、さはりにて奉幣かなはざりけるに」という詞書を持つ。なお、二五八詠は『風雅和歌集』(二一〇九(二〇九九))の歌(「もとよりもちにまじはる神なれば月のさはりもなにかくるし

き」)の左注にも存する。

それには、「是は、和泉式部くまのへまうでたりけるに、さはりにて奉幣かなはざりけるに、はれやらぬ身のうきものたなびきて月のさはりとなるぞかなしき、とよみてねたりける夜の夢に、つげさせ給ひけるとなむ」と記される。

つまり、和泉の歌を引きながら、『風雅和歌集』の二一〇九(二〇九九)番歌が、それに呼応する熊野のお告げとなっているのだ。いうまでもなく、双方ともに「月のさはり」を主題とした歌である。⁽⁵⁾

それでは、物語文学はどうだろうか。物語文学では『うつほ物語』、そして『落窪物語』と『源氏物語』(「浮舟」)に用例が見られる。

『うつほ物語』では姫が俊蔭娘の懷妊をみつける所(「俊蔭」や嵯峨の院の小宮の懷妊が発覚する所に生理が登場する(「国讓中」)。

また、『落窪物語』の一つは典葉助の通いをやめさせる理由として生理が利用され、『落窪物語』のもう一つの例は、石山詣で行けない嘘の言い訳として機能している。

この石山詣でが不可能になる言い訳は『源氏物語』「浮舟」の例も同様である(六巻)。

まとめてみると、生理の描かれ方としては、和泉式部歌(含『風雅和歌集』)では、奉幣できなかった事実が歌われ、物語類に於ては、妊娠の指標であったり、物語で行けない理由であったりした。生理の実態そのもの、もしくはそこから出来る心理の陰影は描かれていない。

そのような中で異彩を放つのは『蜻蛉日記』である。『蜻蛉日記』は生活実感を基とする。故に、生理描写に於ても、生理になった人物の心理が、物語とは相違する心理の綾を表現のなかに紡ぎ出していたのであった。⁽⁶⁾

さて、『蜻蛉日記』の生理について、その存在性をきわやかに示すものは角田文衛の記す生理関係の論考である（角田の生理に関する論考については四に記した）。ただし、生理分析の始発であるにもかかわらず、角田論文はその後、是非の反応もなく放置されてきた。⁷⁾

このような角田論文に関して面と向かって賛意も記されず、反論もされないような状況。それは、生理の論考として、あまりにも扱いが軽すぎるのではないか。確かに角田論考は、不確定要素が強すぎる。ただし、それをも含めて是非を再検討する必要がある。そしてまた、発表された時期やその意図についても考察することが必須である。

三、角田論文に於ける特徴

まず全体的に見て角田の生理論文は崇徳天皇がらみの論考が多く、『蜻蛉日記』関連は少ない。崇徳天皇関係の論考が最も詳細なので、『蜻蛉日記』を考えるうえでも、まず崇徳関連の論文に於ける生理論考を分析しなければ、角田論文の主旨に触れることはできない。

それでは検討を加える角田論文を以下に挙げておく。

○「崇徳天皇の生誕」〔『王朝の映像―平安時代史の研究―』所収、東京堂出版、一九七〇年〕に拠る。引用に際しては、論文中のドイツ語を日本語に改めた。その際、使用した日本語訳は、再録の『角田文衛の古代学Ⅰ後宮と女性』（公益財団法人古代学協会編、吉川弘文館、二〇一八年）に於ける「崇徳天皇の生誕」所収「本稿中に登場するドイツ語訳一覧」に拠った。なお、この論考には生理の表有り（後述）。

○『待賢門院璋子の生涯―椒庭秘抄―』（朝日選書、朝日新聞社、一九八五年）は、初出の「崇徳天皇の生誕」を基にして璋子の生涯が読み物風に語られている。「崇徳天皇の生誕」と重複する部分もかなりあり、また新出部分も存する。なお、この本の初出は『椒庭秘抄―待賢門院璋子の生涯―』（朝日新聞社、一九七五年）。

○「道綱母の身辺」〔『王朝の映像―平安時代史の研究―』所収、東京堂出版、一九七〇年〕。なお、本論考にも表有り（後述）。

○「右大将道綱の母」〔『平安人物志下』所収、法蔵館文庫、二〇二〇年〕↓初出は『世界と日本の歴史』第七卷所収（学習研究社、一九七〇年）。既出の「道綱母の身辺」と変化はない。

今、角田論考をまとめて見ると明らかな如く、生理論考の根幹部分は一九七〇年（昭和四十五年）に集中的に為されていることがわかる。そしてまた、角田の生理論考の中心部分は璋子関係に詳細であり、それを普遍化した形で『蜻蛉日記』関係が同時期に書かれたといえよう。

この時期の問題については後に述べることにして、ここでは、まず璋子関係の説明を中心に考察し、その後に『蜻蛉日記』についても触れていこうと思う。なお、本論考では角田論文に於ける全体の可否、歴史的事象の可否というより、生理（角田は月経と記す）に関する記述に焦点を絞ってその是非を検討していくこととする。

①璋子二十八日型の根拠

まず、璋子の生理関係の記述を見ていきたい。角田の論考のなかで最も有名なこの表から読解していこう（崇徳天皇の生誕）。